

地方
小出版

情報誌

アクセス

毎月1回	1日発行
購読料	定価 150円
	(本体 139円)
	年間 1,500円 (税込み)
振替	00120-0-19017

発行所 (株)地方・小出版流通センター
編集 アクセス編集委員会

〒162-0836 東京都新宿区南町 20
TEL.03-3260-0355 FAX.03-3235-6182

これからの図書館

やっとハコの運営=図書館政策という
フェーズから一步踏み出し始めた

龍ヶ崎市立中央図書館 館長・笹沼 崇

自治体が企業やNPOなどに図書館運営の一部、あるいは全部を任せる流れは全国的に加速し続けている。

私の勤務する茨城県のお隣の栃木県内の市町村は、過半数が指定管理となっており、保守的といわれる土地柄の茨城県においても、潮来市・筑西市に続いて龍ヶ崎市も指定管理となった。

そうした流れの一方で、指定管理に関しては、佐賀県武雄市や神奈川県海老名市の蔵書構成問題を発端に、一般的にアゲインストな空気が強くなっている。

いっそのこと図書館ではなく公営ブックカフェです、と武雄市側も認めたらどうだろうかと思わなくもない。

公務員から民間に移ってみて

公務員を辞めて民間に移り、指定管理の館長となった身としては、役所への説明や承認といった部分での手間は増えたけれども、公務員として直営図書館で勤務していたときと、実際にはあまり仕事内容には違いを感じていない。

役所の予算執行時に、三社見積りや入札など煩雑な事務にかかるコストが大きかったが、民間の指定管理者はその部分での自由度は高い。

例えば事務用の椅子や机やパソコンが欲しいとなったなら、事業費の範囲ならリサイクルショップに即座に買いに行っても問題はないので、1万円以上しそうな椅子が2000円で済んだりする、そういったフットワークの軽さは、

指定管理者の強みのひとつだろう。

これは、公務員上がりの私にはちょっとしたカルチャーショックだった。

「指定管理」の何が問題なのか

指定管理はとかく悪く言われがちだが、何が問題なのだろうか？

それは、行政の姿勢に起因すると思う。

コストカットのために安く請け負う業者や、注目度を重視するあまり図書館の素人に運営を任せてしまう。それでも行政サービスとしてきちんと評価し指導できる所管部局の体制がしっかりとしていればまだ良いが、必ずしもそうではない。そんな場合は、まず上手くは回らない。

勤務先の龍ヶ崎市の場合は、所管の市役所生涯学習課に司書歴30年近い生き字引のような方がいる。幸いにもこのような地域の空気や図書館の変遷を肌で知っている人と「一緒に」図書館を運営し、問題があった場合も共有し、対処することができている。この「一緒に」が大きなポイントなのだと思う。

一方に任せきりではなく、パートナーとして図書館サービスを共に考えている仲間だという、利害を超えた信頼関係が必要である。

受託した側の企業が利益ベースでゴリゴリ進めてしまえば、当然ながら地域の企業や人との軋轢も起きる。

そういうことも全部飲み込んで従来の図書館や地域で培ってきたものもひ

とつの大きな知として財産にしていける度量のある企業であるかが、いま私のような指定管理館の館長たちに突きつけられた大きな課題である。

委託や指定管理が進行する理由

なぜ委託や指定管理が進行するのか？ この理由は司書ならみんな知っている。

国も都道府県も市町村も、文化事業にお金を回さないからだ。

景気が悪ければ真っ先に予算を削られ、景気が良くなっても予算がもらえるのは一番最後。それが日本の文化事業の実情なのだ。司書歴24年目の私もこれは常々実感している。

それでも本を取り巻く文化を支えたいという気持ちで、薄給で雇われながらもがんばっている司書は数多い。1つの館で20年近く勤務していても時給1,000円程度の人なども少なくない。

これは指定管理の企業に限った話ではなく、有能ならばいずれ正社員や正職員になれるといった道筋があるのが本当なのだが、自治体直営の館もそれは同じことで、パートタイムから公務員に昇格することはまずない。

働き手のほとんどがその職場内で昇進の可能性がゼロに近く、それも当然というように図書館界の常識は本当にひどい話である。

私はその部分で司書のキャリアパスを作れる可能性を見出すため、指定管理者への道を選んだという面もある。

書店が運営を担うことへの疑問

最近の指定管理者への批判に伴い、私が疑問に感じていることの一つに、書店が公立公共図書館の運営を担うということがある。

自治体からお金を貰って図書館の運営を受託する一方、その図書館の予算で自社から本を購入する。

この構図自体が、健全とは言えないのではないか。

ある研修会で実際に聞いた話だが、自治体から図書館業務を受託し、本を自社から購入しているという企業が、版元に対して図書館に売ってあげているのだからとバックマージンまで求めているという。

自治体と版元の二方向から収入がある企業に、他の人材派遣会社や地元のNPOなどでは価格面で到底敵うわけがなく、大型書店や取次の利益を優先した図書館運営が主流になっていく。それに対し図書館はどう誠意を見せたものか、悩ましい。

少なくともいえるのは、教条主義者、或いは世論に押されて自分の意志で判断出来ない人ではもう図書館というシステムをコントロールできない。司書自らが、マニュアルどおり前例に従うばかりでなく、文化施設の有存在意義を問い直して再構築していく時期に来たのだと思うし、ここで気を引き締めておかなければと思う。

現状を打破する方策について

これからの図書館というお題なので、あまり悲観的なことばかり書くのも憚られる。

現状を打破する方策についていくつか考えてみたい。

これまで公共図書館は児童と高齢者に対して特に手厚くサービスを行ってきた。

小学生は比較的よく公共図書館を利用し読書をするが、中学生くらいになるととたんに塾や部活に追われて図書館から離れてしまう傾向がある。

ゲーム・テレビ・インターネットなど他のメディアとの競争の中で、本は苦戦を強いられており、図書館も一事は不要論が出てくるほど苦しい状況に置かれてきた。

社会のソフトウェアとして

これに対するひとつのテーゼとして、場としての図書館という発想が生まれた。

今年11月に横浜で開催された図書館総合展においては、地域に貢献する、あるいは再生の起爆剤となるといったベクトルの展示とフォーラムが急激に増えた印象を受けた。

ようやく備品や消耗品を大量購入してくれる取引先というだけでなく、社会のソフトウェアとしての図書館の価値に、各企業が気付き始めてくれたのだろうと思う。

数年前に小布施町の事例が大きく取り上げられたことがあったが、やっとハコの運営＝図書館政策というフェーズから一歩踏み出し始めたということなのだろう。

船橋市に拠点を置く情報ステーションや、さいたま市で動き始めたまちライブラリー@ゆずり葉など、草の根で図書館機能を中核にした市民のノードとなる場をつくる動きも各地で活発に動き出し、それぞれが情報を発信し注目を集めるようになっていく。

本を通して人と繋がる場を作る

彼らの活動のキーとなるのは本をテーマに人が集まる場を創出すること。

他にもビブリアバトルなど、本を通して人と繋がる場を作る動きは近年盛んになっている。

こうした市民の動きを公共図書館も察知して動き始めた事例も増えつつあり、図書館の来館者数は全国的にも年々伸びている。

こうした社会における図書館のプレゼンスの向上は、換言すれば本の力の再評価と見ることもできるのかもしれない。

司書としてここで改めて考えたいのは、私たち自身の仕事の変質とそれに対する対応力ではないかと思う。

資料の収集と保存と提供が図書館の仕事にとって要の大黒柱であり、そこは今後も変わらないし変わってもらっては困る。選書方針にしても然り。

それに加えて、図書館という場を地域のためにもっと活用することというミッションが加わったのだと私は考えている。そのとき必要なのは、人と本をいかにつなぐかというコーディネート力だろう。

5つの具体的な活動

例えば私も関わっている「図書館と地域をむすぶ協議会」が、標榜しているのは以下の通りである。

(1) 空間づくりからシステム構築、企画・運用・支援まで図書館に

関わる各種コーディネート

- (2) 図書館および地域づくりを担う人材の啓蒙・育成とネットワーク化
- (3) 図書館と地域づくりに関するモデル事業の推進とワーキンググループ運営
- (4) 推奨するシステムおよびサービスの安定供給のための斡旋と管理
- (5) 図書館をめぐる環境改善および社会的な地位向上のための各種活動

これらの活動を、慶應義塾大学講師／編集工学機動隊ギア代表の太田剛氏がチーフディレクター／コーディネーターとし、全国のいくつかの図書館の館長をはじめ図書館関係者などがアドバイザーとして参加する。

活動を支える協賛企業

この活動の大きな特色は、いくつもの賛助企業が活動を支えてくれる点にある。

図書館員有志による手弁当での活動はいくつもあり、成果を出している例も少なくはないが、継続的に成果を出し続けるには経済的なバックボーンは不可欠であり、それでこそ責任ある提言やコンサルティングができるという道理である。

図書館が自力でできないことは、そうした団体の力を借りてみるという新たな試みがスタートしている。

本力を知らしめる

図書館の予算は減る。減るから自治体は委託や指定管理をコスト削減の手段に使うという悪循環を変えていくには、社会における図書館の重要性を知ってもらうこと、本力を知らしめていくことが、図書館に課せられた課題であろう。

本来の図書館の意義、蔵書の厚みや保存について、図書館の地域資料やデータの活用、電子図書館のこと、出版界と図書館界の相互理解の重要性などについては、またの機会に改めて述べてみたいと思う。

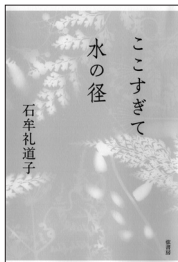
*

(ささめまたかし・龍ヶ崎市立中央図書館 館長)

新刊ダイジェスト

※価格は税込（消費税率8%）表示です。

『ここすぎて水の径』 ●石牟礼道子著



戦後日本文学の最高傑作ともいわれる『苦海浄土』の著者・石牟礼道子の、「心の旅」を綴ったエッセイ集である。豊饒な不知火の海を背景に紡がれる魂の言葉がほとぼしり、読む者の心に沁みる。

「(水俣病の患者さんたちは) 一人一人、時代の極相を荷い続け、ゆくべき地平の意味を読みとろうとしているかにみえる」そして「哲学とか思想というものは生身のいとなみに宿り、蓄積されて閾値を超えると詩になるのだと、このごろ気づく。・・・患者さんたちは今、詩を生

きているのではなかるうか。そもそも彼女には、感性豊かな子供時代を過ごした四、五歳の眼でみたような作品が多いが、そのことは本書からもうかがえる。石にかかわる文章(生家が石屋だった)や、「私にとって、夢というものは、とっておきの楽しみ」という夢についてのものも多い。なお、本書47篇中7篇は、『石牟礼道子全集—不知火』(全17巻)にも収録されておらず、貴重である。

◆2592円・四六判・313頁・弦書房・福岡・2015/11刊・ISBN・9784863291263

『大丈夫、死ぬには及ばない —今、大学生に何が起きているのか』 ●稲垣 諭著



大学で哲学を教える著者は、講義後学生たちにリアクションペーパー(リアペ)を書かせることにしている、という。特定のテーマを与えず、講義に関連したことで連想が膨らんで講義内容から逸脱してしまったことでもかまわない。本書では、そんなリアペの中から学生たちのイレギュラーな経験が多く紹介されている。例えばリストカットを繰り返す女子学生。あるいは突然現実感覚が消失してしまう離人感に悩まされる学生もいる。他に、死への強迫や性的倒錯、拒食や嘔吐等、内容は多岐に渡る。著者は、それらのリアペを紹

介しながら、哲学や心理学の知見を絶妙な仕方で織り交ぜ、幾度も「魂のしづとさ」という言葉を繰り返す。学生達の特異な体験は壊れた安定系の代替機能を擬似的に果たしているが、逆説的にこうまでして生きのびる魂のしづとさを人は持っていると言える。その擬似的な安定系は可変的であり、新たな安定系への可能性を持つ。大丈夫、死ぬには及ばないのだ…それが本書の底流に一貫する思想である。

◆2160円・四六判・254頁・学芸みらい社・東京・2015/10刊・ISBN・9784905374893

『わいわいきのこのわいわいきのこ解説つき -ロシアのお話』 ●絵/タチャーナ・マーヴリナ・文/レーム・パトルシャンスカ・訳/牧野原羊子

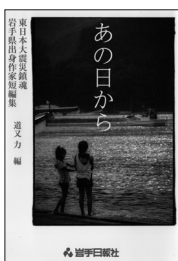


昔々、森の中の木の根元にヤマドリダケのおじさんが住んでいた。おじさんが孫のナラタケたちに自分の誕生日のお祝い会にお客さんと呼んで来るように頼むと、森のあちこちからきのこたちが集まってきた。いよいよお祝い会が始まり、みんな食べたり飲んだり、わいわいわい。ところが、どこから来たのか二人の新しい客が現れ、みんなを押しつけて食卓についてしまう。その二人は招いていない毒きのこだった。はたしてお祝い会はどうになってしまうのだろうか。

「料理が七つ、全部キノコ」という諺があるほどロシア人にとってきのこは重要な食べ物。本書はそのロシアのお話の絵本。13種類のきのこが登場し、きちんとそれぞれの特徴が紹介されている。表情豊かなきのこたちを描くのは国際アンデルセン賞受賞画家。巻末には国立科学博物館のきのこ博士のカラー画像付解説もあり、子どもでも大人でも楽しめる内容となっている。

◆1620円・A4判・16頁・カランダーシ・東京・2015/11刊・ISBN・9784990703219

『あの日から —東日本大震災鎮魂 岩手県出身作家短編集』 ●道又 力編



岩手県生れの作家12名(内9名は在住)が、3.11東日本大震災をテーマに描いた短編小説14編のアンソロジー。半数が書き下ろしである。近しい者を失った深い喪失感、ぼっかり空いた胸に漂う幻影、生き残ってしまったことへの罪悪感、しかしやがて辛い現実と向き合い、温かい出会いもあり、心励まして歩み始める。多くの作品に共通するモチーフだ。冒頭、高橋克彦「さるの湯」。カメラマンの主人公が、写真に写る被災した死者の姿と死者たちとの交感を通して、記憶の彼方に捨てて来た父親しを蘇

らせる。震災後、多くの作家が、復興が進まない中で文学が何の役に立つかと煩悶し、筆を持たなくなった。時代小説家高橋もその一人であったが、何故か震災と結びついた短い現代物のホラーだけは何とか書けたという。各作品前の中扉に挿入された、やはり岩手県出身の松本伸の、海とその周辺の何気ない日常を撮ったモノクロ写真が、作品の深層風景を静かに語っているようだ。

◆2160円・四六判・496頁・岩手日報社・岩手・2015/11刊・ISBN・9784872014150

『地形由来でみる東京の地名』 ●山内和幸著



地名というものは様々あり、変わった地名に出会うとその由来が気になります。本書も東京とその周辺の地名を中心にその由来を解説しています。その最大の特徴は、漢字の字面や伝説の類を排し、できる限りその土地の地形に由来を求めているところです。例えば地名に「駒」という字があれば馬に関係があるように思いがちですが、実は地形を表す言葉に後から漢字が当てられることが多く、意外に関係がありません。また歴史上の逸話などで由来が説明されることもあります、それも多きが後から付け加

えられたようです。著者が日本中に散らばる同種の地名（文字よりも発音）と地形を比較して、地名の由来を解き明かす手並みは鮮やかなものです。しかしそんな著者でも伝承由来の可能性を捨てきれない地名もあつたりします。ここからは取り上げられた場所の地形的な特徴が浮かび上がると共に、地名の由来を探ることが一筋縄ではいかないことも改めて実感させられます。

◆1728円・四六判・153頁・まつ出版・岐阜・2015/11刊・ISBN・9784944168446

地小出版
方小出版

流通センター

ジャンル別
新刊案内

2015年11月1日～30日
流通センター着

※各ジャンル内での出版社名は
所在地の北から南の順に並んでいます。

価格は税込（消費税率8%）表示です。

【雑誌】

◆ゆきのまち通信 161 企画集
団ぶりずむ編 A5 50頁 500
円 企画集団ぶりずむ [青森]
978-4-503-20694-7 15/11

◆GREEN REPORT 431
廣瀬 仁編 A4 192頁
2800円 地域環境ネット [埼玉]
978-4-905457-63-3 15/11

◆かまくら春秋 No. 546 伊
藤 玄二郎編 B6 89頁 320
円 かまくら春秋社 [神奈川]
978-4-7740-0665-9 15/10

◆くらしと教育をつなぐ We
No. 199 中村 泰子編 稲
邑 恭子編 A5 80頁 864
円 フェミックス [神奈川]
978-4-903579-67-2 15/12

◆Be! 121号 No. 145
今成 知美編 A5 105頁 864
円 アスク・ヒューマン・ケア [東京]
978-4-901030-98-4 15/12

◆仏事 No. 183 奥村 昇編
A4 104頁 1620円 鎌倉新
書 [東京] 978-4-503-20709-8
15/12

◆月刊住職 No. 204 矢澤 澄
道編 A5 199頁 1404円 興
山舎 [東京] 978-4-908027-13-0
15/11

◆子どもの文化 No. 534 片
岡 輝編 A5 48頁 313円
子どもの文化研究所 [東京]
978-4-503-20691-6 15/11

◆子どもと本 第143号 子ども
文庫の会編 A5 48頁 637
円 子ども文庫の会 [東京]
978-4-906075-47-8 15/10

◆the座 No. 85 井上 麻矢
編 B5 44頁 1000円 こま
つ座 [東京] 978-4-503-20699-2
15/09

◆the座 No. 86 井上 麻矢
編 B5 40頁 1000円 こま
つ座 [東京] 978-4-503-20700-5
15/10

◆the座 No. 87 井上 麻矢
編 B5 40頁 1000円 こま
つ座 [東京] 978-4-503-20701-2
15/10

◆茶道の研究 No. 720 三徳
庵編 A5 80頁 540円 三徳
庵 [東京] 978-4-503-20692-3
15/11

◆調査情報 No. 527 市川 哲
夫編 255mm×160mm判 96頁
789円 TBSテレビ [東京]
978-4-906908-88-2 15/11

◆東京かわら版 No. 507 佐
藤 友美編 204mm×108mm判
142頁 500円 東京かわら版
[東京] 978-4-503-20706-7
15/11

◆俳句四季 No. 460 西井 洋
子編 松尾 正光編 B5 160頁
931円 東京四季出版 [東京]
978-4-503-20704-3 15/11

◆みんなの図書館 No. 464
図書館問題研究会編 A5 80頁
810円 図書館問題研究会 [東京]
978-4-503-20697-8 15/11

◆おりがみ No. 485 日本
折紙協会編 A4 51頁 786
円 日本折紙協会 [東京]
978-4-86540-029-8 15/12

◆海運 No. 1058 日本海運
集会所編 A4 72頁 1296
円 日本海運集会所 [東京]
978-4-503-20693-0 15/11

◆Fuji Airways Gu
ide No. 619 フジ・イン
コーポレーテッド編 B5 96頁
380円 フジ・インコーポレーテ
ッド [東京] 978-4-503-20707-4
15/11

◆フリースタイル 30 吉田
保編 A5 109頁 959
円 フリースタイル [東京]
978-4-939138-80-5 15/12

◆AROMA RESEARCH
No. 64 高橋 由美編 A
4 100頁 2160円 フレ
グランズジャーナル社 [東京]

売行良好書

期間：2015年11月16日～12月15日

【出荷センター扱い】 ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

- (1)『点滴ポール 生き抜くという旗印』1512円・ナナロク社
- (2)『ここすぎて水の径』2592円・弦書房
- (3)『本土の人間は知らないが、沖縄の人はみんな知っていること』1404円・書籍情報社
- (4)『北海道の守り方』1512円・寿郎社
- (5)『フィールド版 木の実のガイド』1620円・トンボ出版
- (6)『食人の形而上学』3024円・洛北出版
- (7)『わいわいきのこのわいわい きのこ解説つき』1620円・カレンダーシ
- (8)『山陰駅旅』2000円・今井出版
- (9)『統合失調症をたどる』2700円・ラゲーナ出版
- (10)『不登校は1日3分の働きかけで99%解決する』864円・リーブル出版
- (11)『徴兵体験 百人百話』1620円・17出版
- (12)『国宝 松江城 美しき天守』1620円・山陰中央新報社
- (13)『探訪 比企一族』1728円・まつやま書房



【三省堂書店神保町本店 センター扱い図書】 ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

- (1)『本の雑誌 391号』840円・本の雑誌社
- (2)『おすすめ文庫王国 2016』820円・本の雑誌社
- (3)『フリースタイル 30』959円・フリースタイル
- (4)『東京かわら版 1月号』500円・東京かわら版
- (5)『奥武蔵登山詳細図 武甲山・武川岳・伊豆ヶ岳・丸山 全130コース』950円・吉備人出版
- (6)『古木屋ツアー・イン・首都圏沿線』2376円・本の雑誌社
- (7)『高尾山・景信山・陣馬山登山詳細図』823円・吉備人出版
- (8)『古木屋ツアー・イン・神保町』2160円・本の雑誌社
- (9)『深夜百太郎 入口』1620円・ナナロク社
- (10)『悲しみの秘義』1728円・ナナロク社

【ジュンク堂書店池袋店 地方出版社の本一センター扱い図書】 ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

- (1)『奥武蔵登山詳細図 武甲山・武川岳・伊豆ヶ岳・丸山 全130コース』950円・吉備人出版
- (2)『奥多摩東部登山詳細図 全88コース』823円・吉備人出版
- (3)『食人の形而上学』3024円・洛北出版
- (4)『イリオモテヤマネコ』853円・琉球新報社
- (5)『地球のしくみを理解する』1836円・広島大学出版会
- (6)『ピットとデシベル』2268円・書肆侃侃房
- (7)『砂丘律』1512円・青磁社
- (8)『山陰駅旅』2000円・今井出版
- (9)『教養講座 琉球・沖縄史』2160円・編集工房東洋企画
- (10)『山梨の古城』2592円・山梨ふるさと文庫

以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
URL：http://neil.chips.jp/chihosho/ ツイッター公式アカウント：@local_small

トピックス — ★★

▼さる10月24日、鳥取県立図書館において地方出版文化功労表彰式および受賞記念講演会が開催されたのですが、今年はこの催しに韓国からの視察団を迎え、国境を超えた交流の輪を広げることができたとのことでした。その視察団の方達は、韓国の地方出版や地域誌に関わる編集者であったり、大学関係者、自治体の文化政策担当者等々、多彩な顔ぶれであったようです。日本以上に首都ソウルに一極集中する韓国では、日本同様、地方創生が課題となっているらしく、地方出版物が一堂に会する図書展であるブックインと通りの試みや、県立図書館を中心とする地方行政の役割などが視察の対象となったようです。長年地方出版、地方文化振興のためと取り組んでこられた試みがこうやって海外で注目され参考とされるのは、実行委員会の方々や鳥取県民にとっては労が報われたといったことになるのではないのでしょうか。今は国内に限定している地方出版文化功労賞が国際化して、いつかノーベル賞のように世界中の地方出版を顕彰するものになる日がくるのかも…というのは飛躍しすぎでしょうか。

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

郵便販売のご注文方法

- ◎お名前、お届け先（郵便番号、住所）、連絡先お電話番号、ご注文品の書誌名、冊数の必要事項を明記のうえ、下記までFAXでご連絡ください。
- ◎送料は、冊子小包・メール便共実費でお送りさせていただきます。基本的にメール便は、一冊210円でお送り致します。（メール便の到着は、発送してから3～4日かかります。）お急ぎの方、その他ご要望がございます場合はお気軽に下記までお問い合わせ下さいませ。
- ◎なお書籍お買上総計（税抜き価格）が5,000円以上の場合は、送料をサービスさせていただきます。
- ★地方・小出版流通センター
FAX：03-3235-6182



三省堂書店

営業の
ごあんない

神保町本店 4階
地方出版・小出版物フロア

営業時間 10:00 AM～8:00 PM
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1
TEL. 03-3233-3312(代)
URL. http://www.books-sanseido.co.jp

本店4階売場では、地方・小出版流通センター扱いの新刊全点のほか、地域別に書籍を取り揃えております。また、地域ならではのタウン誌、趣味の雑誌も扱っております。

